

氏名	井上三郎
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第424号
学位授与の日付	平成13年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	ジュリアン・グリーン研究序説 ——『幻を追う人』『モイラ』の読解——

論文調査委員 (主査) 教授 吉田 城 教授 田口 紀子 助教授 増田 眞

論文内容の要旨

本論は、ジュリアン・グリーン(1900—1998)の小説『幻を追う人』(1934)『モイラ』(1950)の読解を通じて、この小説家における幻想性・宿命性の主題を究明することを目的にしている。グリーンは両親ともアメリカ人でありながら、フランスで生まれ育ち、フランス語による作品を書き続けた。このアイデンティティの不確かさは、また両親がアメリカ南北戦争で敗れた南側の人間であったこと、グリーンが一生を通じて同性愛者であったこと、そしてプロテスタントの洗礼を受け、母親の厳格なプロテスタント教育を受けながら、紆余曲折の果てにカトリックに帰依することなどとあいまって、彼の内面的志向を支えることになった。

じっさい、同時代の小説家の多くが戦争や政治問題に積極的に取り組んだのにひきかえ、グリーンは終始政治に関心を示しながらも、距離を置き続け、いわゆるアンガージュマンの文学活動とは一線を画したのである。彼の関心は、死や欲望、宿命、宗教といった本質的に内面的な諸問題にすどく向かっていったのである。グリーンのような姿勢をあきらかにするうえで、中期を代表する作品『幻を追う人』と、後期を代表する『モイラ』に焦点を絞って考察することは、重要な手がかりを与えてくれるはずである。

第1部第1章

『幻を追う人』に登場する人物一人ひとりについて、その行動と心理を考察する。作品の主要な語り手であるマリ＝テレーズは、どのような女性か。もともと信仰をいだきながらも、欲望との相克に苦しむ人物である。その母プラス夫人は、存在感のある人物だ。娘および甥のマニユエルに対して、過度に厳しい態度をとるのだが、その背後にはサディズム的な性格がうかがわれる。愛する男との結婚が実現できず、その怨恨は抑圧した欲望とないまぜとなり、周囲の人間の不幸を楽しみ、願うという報復的な態度にあらわれる。

病身のマニユエルもまた不幸な人間だ。純粋なものにあこがれる性格であるがゆえに、欲望を昇華できず、苦しみのなかにいる。いっしょに住むマリ＝テレーズへの恋心はうまく表現できず、ごごちない異常な行動を生み出す。それは夜中マリ＝テレーズを散歩に連れ出す場面、そして数人で森に散歩に行く場面で示されている。そして欲望表現の挫折は、周囲の大人たちによって処罰される。こうしてマニユエルは現実世界に絶望し、自分で物語をつくるという想像世界へと逃げ込む。

こうして書かれたのが、小説中央にはさまれた「あり得たこと」という一章である。語り手のマニユエルは、物語のなかで、近くのネーグデルの城へと行く。そこで城主の瀕死の老伯爵に本を読み聞かせる仕事に就くのだが、城の異常な人物たちに翻弄される。伯爵の息子アントワヌは放蕩者で、そのうえ乱暴者だ。マニユエルは二度にわたってアントワヌから暴行を受ける。だがこのアントワヌの姿には、マニユエルの欲望が投影されている。伯爵の娘である子爵夫人は、マニユエルに対して高圧的で、ここにはプラス夫人に共通するサディズム志向が読みとれる。子爵夫人はマニユエルの満たされない欲望の対象となり、最後には夫人みずからマニユエルの抱擁を求めに来る。交合のさなかに死ぬ夫人の姿は、まさにマニユエルのファンタズムが生み出した幻である。すなわち、「あり得たこと」は決定的に欲望の世界の表象なのである。

グリーンにとっての創造行為は、マニユエルにとってと同様、ある種のカタルシスもしくはエグゾルシスム(悪魔祓い)

であったことが明らかになる。

第1部第2章

この章では、『幻を追う人』を死の観点から検討する。ここでもまず人物単位で考察を加える。まずマリ＝テレーズであるが、語り手の現在時においてはキリスト教の信仰を失っていて、もっぱら死の想念にとらわれている。これは作者グリーンの執筆当時の心象を反映しているものと考えられる。プラス夫人の不幸への愛、病気への関心は、死に向かったの漸進的な歩みの一環とみなされる。プラス夫人は一見厚い信仰をもっているようであるが、それは真の意味での信仰ではない。彼女の不幸愛は、存在不安の一形態にすぎない。しだいに病気が進行し、手記を書いたあと夭折するマニユエルの場合、やはり死の恐怖と固定観念にしばられている。

「あり得たこと」に登場する人物群もまた死の形象であると言える。遺伝的な病に冒され、自室に引きこもって死を待つだけの城主の老人は、ネーグルテールの城全体に「死者の威光」を投げかけている。伯爵の看護を一手に引き受けるジョルジュ夫人は、まさに「死の化身」である。アントワヌは、放蕩で生を謳歌しているように見えるが、じっさいは死を恐れつつ生きている。城の実質的な支配者である子爵夫人も例外ではない。病や死に魅せられた夫人は、伯爵の死亡したときにマニユエルと肉体関係を結ぶが、すぐに息絶える。あたかも欲望の果てに死が待ち受けていることを知っているかのように。物語の主人公であり語り手であるマニユエルは、こうした人々に接することで死の恐怖をおぼえつつも、死に魅惑される。

結局『幻を追う人』における幻想とは、純粹志向と肉体的欲望の相克および死の魅惑と恐怖というふたつの葛藤から生じた人間の苦悩を形象化したものだと考えられる。

第2部第1章

『モイラ』を宿命性という観点から読み解く。ここでは主人公ジョゼフを取りまく人物たちに焦点を当てる。まず、主人公の友人プレローである。この人物はジョゼフがひそかに同性愛的情熱を燃やす対象であるが、挑発してジョゼフを決闘に導く。これによりジョゼフのうちに暴力性がめざめる。友人のサイモンは、ギリシアの神々の彫像に注意を促し、その美をたたえる。ジョゼフはサイモンによって肉体的なものへと惹かれていく。信仰をもつデーヴィッドの場合は、ジョゼフに対して無能な聴聞司祭の役割を果たすことになる。つまり、世界観と宗教観が異なるために、ジョゼフを神の道にいざなうどころか、肉体的存在でもあるモイラの方へと向かわせている。デーヴィッドはシェイクスピアの作品を贈るが、それは猥褻な箇所を含む『ロミオとジュリエット』であった。また彼はジョゼフをシャベルや道具の置いてある板小屋に案内するが、のちにジョゼフがモイラを殺害し、このシャベルで遺骸を埋めることになる。間接的ながら、主人公の犯罪を誘発していると言えよう。

このほかの副次的人物もまた、多かれ少なかれジョゼフの人生に一定の役割を果たしている。デア夫人、マック・アリストター、キリグラー、そしてデア夫人の下宿に集まる学生たちは、ジョゼフを現世的なもの、肉体的なものへと向かわせる。モイラとの出会いは、これらの人物によっていわば準備されていた。またモイラ自身も、みずからの官能性を意識して、ジョゼフの欲望を挑発する。

グリーンはジョゼフの苦悩と逡巡と欲望の道筋を、これら周囲に配置された人物の複合的影響作用によって、運命的なもののようにつけていく。だが人物ばかりではない。一見些細なオブジェもまたジョゼフの破局的運命に荷担しているのである。シガレットケース、置き忘れたセーター、板小屋のシャベル。これらはジョゼフをモイラへと傾斜させる。ギリシアの彫像や白い木蓮の花は肉体性、官能性へと誘導する。いわんやモイラが胸に隠すジョゼフの部屋の鍵、ベッドに脱ぎ散らかした下着類など、さまざまな小道具がエロティックなファクターとして重要な機能を果たしている。このように、主人公の葛藤から生じる選択的行動は、じつは外的な人物および事物によってまえもって規定されているかのようだ。

第2部第2章

この章では『モイラ』を、ジョゼフの内的ドラマの分析を通じて読解する。ジョゼフは信仰をめざし、純粹性を希求する青年であるが、また同時に肉体的欲望につき動かされ、異性愛と同性愛の苦悩を知る人間でもある。この二つの心理的葛藤から、暴力や苛烈な行動への意志が生まれる。暴力性を分析すれば、小説の本質的テーマが明らかになることだろう。

まずジョゼフには、純粹志向すなわちいっさいの肉体的なものへの嫌悪、現世的なものへの警戒心と敵愾心があることを確認する。プロテスタントの牧師を志望するデーヴィッドと比べて、その差異は明らかである。デーヴィッドが「この世は

不純である」という前提を認めて、穏やかな信仰をもっているのにひきかえ、ジョゼフは戦闘的かつ非妥協的に霊肉の分離を信奉し、愛情も結婚もみな悪魔的な存在として否定してしまう。シェイクスピアの本にみだらさしか読みとらず、モイラに肉体的誘惑しか感じない狭量な狂信者でありながら、そのじつ肉体的欲望にしばしばつき動かされるのだ。

プレローに対する暴力で消費されつくされなかったエネルギーを、大楓の木を叩くことで排出するという挿話は、ほとんど性行為の比喩になっている。主人公がさまざまな肉体的誘惑に敏感であることは、純粹であろうとする本心がかえって引き起こす不可避の性質である。

ジョゼフの凶暴さ、暴力性はしたがってたんにこのような二元論から導き出された物質嫌悪に由来するばかりではない。それはまた自己の欲望との戦い、欲望の対象を抹殺したいという自己救済の絶望的な試みであるとも言える。いくつか重要なエピソードを取り出してジョゼフの行動と心理を探ってみると、彼においては宗教的高揚と肉体的高揚が、しばしばたやすく交替ないし混交しがちであることが分かる。そして彼の暴力性は、この小説に特有の「火」「炎」のイメージがそうであるように、神に向かう純粹性と、欲望に向かう官能性の相克から生じるものである。

モイラの殺害もこのような論理でとらえる必要がある。ジョゼフがモイラを抱いた直後に絞殺するのは、肉体的誘惑に負けたことに怒りをおぼえ、いわば自己を処罰するためでなかったのか。これこそジョゼフの暴力性の必然的結末であったと言える。これをふまえて犯罪後のジョゼフの行動を考えると、そこにはもはや選民意識から解放されたつみびととして、謙虚に神へと向かう男の姿が浮上する。犯罪現場に降りしきる雪も救済の可能性を示唆するものではないか。

第2部第3章

本章は『モイラ』の「秘められた」物語を分析する。それはサイモン、モイラ、プレローの三人に関するものである。この三人はみなそれぞれのやり方で、ジョゼフに愛情を感じている。サイモンはジョゼフに同性愛的な感情を抱き、それを白い木蓮の贈り物によってあらわす。だがジョゼフはそれを拒絶する。それも、木蓮をもみしだき、手紙を破り捨てるという方法で、好意に対して怒りの発作で応えるのだ。絶望したジョゼフは離れ、やがて銃の暴発事故で死ぬ。一種の自殺だと考えられる。ジョゼフは徹底してサイモンの死にも冷淡である。

ヒロインのモイラもまたジョゼフの屈折した性格の犠牲となる。ジョゼフは肉体憎悪の気持ちからモイラに惹かれつつもずっと避けて近づかない。友人たちから、モイラの不品行を知って、悪魔的な存在だと決めつけているからである。だがモイラの目には、ジョゼフはそれまで交際した男性たちにはない新鮮な魅力をもって映る。つまり汚れを嫌う純粹な青年と見えるのだ。友人たちの陰謀によって堅物のジョゼフを誘惑しようとジョゼフの部屋を訪れたが、自分がジョゼフに関心というより愛情をもっていることに気づき、部屋を去ろうとする。しかしその瞬間、ふとした接触がきっかけとなり、ジョゼフは獣に変身して、モイラを襲い、のちに殺してしまう。この悲劇はジョゼフの心情から来る宿命的なものである。

プレローの場合もまた、サイモンと同じ同性愛の問題が絡んでいる。プレローは社会的に許されない愛情を意識して、ジョゼフを決闘へとさそう。決闘で命拾いをしたプレローは、ジョゼフを愛するがゆえに以後避け続ける。だがジョゼフがプレローを軽蔑するのにひきかえ、プレローは「守護天使」としてジョゼフを陰から守ろうとする。サイモンと異なり、プレローは自分の愛の不毛性を認識しているために悲劇は避け得たが、こうして宿命の人生を送ることになる。

第2部終章

フランスの伝統小説は因果律の連鎖によって構成されているので、「宿命の小説」ということができる。『モイラ』の主人公ジョゼフは、たとえばバルザックの描くゴリオとは異なり、自由意志ではなく、受動的に人生を生きる。その点ではラシーヌの悲劇に近いとも言える。また、エミール・ゾラのように観察の結果として成立した小説とも違い、グリーンの小説では作家が語り手および登場人物と一体化して、いわば共犯者として物語をつくる。グリーンにとって小説を書く「冒険」は先の見えない行為なのである。

結論

『幻を見る人』と『モイラ』に共通するのは、主人公の「純粹志向」である。この肉欲の否定は、グリーンの『日記』に述べられているように、作家自身の前半生を悩ました大きな問題であった。グリーンを規定する「幻想」と「宿命」のあり方を二つの小説に見てきた。本論文はグリーン研究の基礎を築くものである。

論文審査の結果の要旨

・本論文はフランス20世紀の作家ジュリアン・グリーン（1900—1998）の小説『幻を追う人』（1934）『モイラ』（1950）の読解を通じて、この小説家における幻想性・宿命性の主題を捉え直すことを目的にしている。グリーンはアメリカ人を両親にもち、フランスで生まれ育った。両親はアメリカ南北戦争で敗れた南側の人間であり、グリーンに少なからぬ影響を及ぼした。またグリーンは同性愛者であり、宗教的には母親の厳格なプロテスタント教育を受けながら、紆余曲折の果てにカトリックに帰依するなど、彼の特異な文学世界は、この不確実なアイデンティティと深い関係がある。グリーンは同時代の他の作家に比べて非政治的であり、内面志向であると言われる。

論者はグリーン文学の内面的特質をあきらかにするために、中期を代表する作品『幻を追う人』と、後期を代表する『モイラ』に焦点を絞って考察していく。作品を前にした論者の読解は、近年よく見られる厳格な方法論に依拠したものではなく、あくまでも作品のうったえかける内発的な問題系を、テキストに即して解釈していこうとする、むしろ伝統的な文芸批評の形式にのっとっている。

本論文を通してみられる方法は、主要登場人物の行動と心理を、文脈にしたがって詳細に検討し、一定の行動原理に還元してみるといえる。人物ごとに検証していくこのような方法は、やや単純であるというそしりをまぬがれないが、深い読み込みと冷静な分析によって、十分説得的なものになっている。

『幻を追う人』をあつかった第一部前半においては、主要な語り手であるマリ＝テレーズと主人公マニュエルの性格の分析が中心となる。マリ＝テレーズは少女時代からキリスト教の信仰が厚かったが、しだいに信仰を失い、欲望と宗教心の葛藤に悩む娘である。マニュエルは病身の青年で、肉体的欲望を忌避しながらそれを抑圧しきれないために、苦悩の人生を生きている。マニュエルが寄寓するマリ＝テレーズの家は、その母プラス夫人というサディストが支配する空間だ。マリ＝テレーズがマニュエルに欲望を呼び覚ますたびに、彼はプラス夫人に処罰される。論者はこのような苦悩に襲われた人々を個々に分析することで、マニュエルが「あり得たこと」という手記を残した理由に迫っている。つまりマニュエルは現実を逃避し、ネーグデルテルという死の想念に覆われた城の物語をつむぎ出すことで自己を救済しようとする。

第一部後半において論者は、「あり得たこと」の章がもつ死と病の形象について詳しい読解をおこなう。瀕死の病に苦しむ城主、その息子で放蕩者のアントワヌ、城主の娘で高慢な美しい子爵夫人、城主の看護を引き受けているジョルジュ夫人。語り手のマニュエルを雇うこれらの人々は、生き方はちがうが、いちように死に魅惑されると同時に死を恐れている。ここには、マニュエルの、そしてグリーンへの死への関心が明瞭に読みとれるとする。

論者はこの小説の幻想性を、トドロフ、カステックスらの幻想小説論に照らして浮かび上がらせ、現実のなかに超自然的現象が出現するという点で、幻想小説の正統的後継者であるとしている。だが、子爵夫人の突飛な行動や急死、伯爵の遺伝病など、どの点でもサスペンスの技法は生かされているが、超自然であると定義することは無理があるように思われる。グリーンに幻想性は、内面的な恐怖に根ざすものであって、論者のように解釈するのはすこし問題がある。

本論文の第二部は『モイラ』の読解である。先行する研究や論考を参照しつつ、論者は主人公ジョゼフがどのようにして宿命に導かれて破局への道を進むか、解明しようとする。第一章はジョゼフを取りまく人々の心理と行動を検討する。ここでは、同性愛的な感情に動かされ、死の道を選ぶ友人サイモン、プロテスタントの牧師を志望し、ジョゼフより穏やかな信仰心をもつデーヴィッド、みずからの同性愛に気づき、ジョゼフから距離を置こうとするプレローなどの人物が、主人公の運命に深くかかわっていることを確認する。第二章はジョゼフ自身の内面的な葛藤の分析である。ここでは、神を志向し肉体を嫌悪する激越なジョゼフの性格と、欲望に強く動かされながらもそれを禁圧する彼の意志力の相克が浮き彫りにされる。そしてすべての根源に、ジョゼフの肉体的・精神的「暴力性」violenceがあることを立証する。

第三章はサイモン、モイラ、プレローの「秘められた物語」すなわち主人公ジョゼフの狭い視野ではとらえきれていない三人の重要人物の心理を探る。論者はいくつかの重要なエピソード、たとえばサイモンが愛情のしるしに贈る木蓮の花、モイラの肉体的誘惑とそれに続くモイラの殺害、プレローの保護者的態度などについて再検討し、それぞれがジョゼフの運命を決定している様子を描き出す。

以上のように本論文はグリーンに登場人物の分析を中心として、キリスト教の信仰と肉体的欲望の葛藤、この葛藤から必

然的に生まれる悲劇，その宿命性について考察することによって，作家自身の内的な問題をあぶりだそうとしている。また論者の「火」「炎」「赤色」「雪」などの象徴に関するテーマ分析は独創的で，魅力的である。本論文は，他のグリーンの小説や膨大な『日記』の詳細な検討をふまえていて，実証的で手堅く，十分説得的な論旨を構成している。ジュリアン・グリーン研究におおいに貢献する，正統的な論考となっている点で，評価に値する。

だがいくつか問題があることは否めない。まず，論者が再定義している『幻を追う人』の幻想のあり方については，より緻密な考察が必要であると思われる。その語りの構造の特異性についても，ページを割くべきであった。また，グリーンの小説の宿命性を論じるとき，バルザックやゾラと対比してグリーン構築意図の欠如，自発性の特性を浮き彫りにしているが，そもそも小説というフィクションが作家の作り出したものである以上，作家が作中人物と共犯関係を結んで物語を作っていくというような評言は，レトリックにすぎないように見える。また，『モイラ』の語りの複眼的な手法や，ジョゼフの新調する服の意味，プロテスタントとカトリックの相違の問題について言及があってもよかった。加えて，時として分析や読解がやや平板なものにとどまっている点は惜まれる。もう少し反復をひかえて緊密な構成にしたなら，より充実した論考になったことであろう。

とはいえ，論者が本論文を「研究序説」と位置づけているように，これらの問題点は今後さらに考究をすすめて改善され，また深化されることが期待される。この論文がグリーン研究に，ひいては20世紀前半のカトリック文学研究に，価値ある一石を投じたことに疑いをいれない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として，十分価値のあるものと認められる。2001年9月4日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について論者に見解をただした結果，合格と認めた。